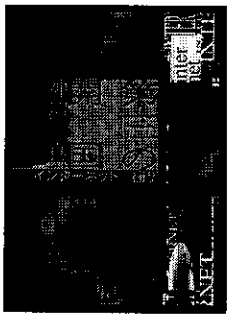
〈書　　評〉

第三の開国　インターネットの衝撃

神沼二真 著

20cm　288頁

紀伊國屋書店 発行



情報処理の分野では，言葉のはやりすたりが激しく，もはや新しいともいえないようであるが，ネオダマという言葉がよく聞かれる．ネットワーク化（コンピュータ同士の通信線による接続）のネ，オープン化（多様なハード・ソフトウエアの自由な結合）のオ，ダウンサイジング（低価格・小型機器による処理）のダ，マルチメディア（映像・音声など多様な情報の一元的取り扱い）のマを合わせたもので，この分野での現今のおよその関心の持たれようが見えよう．

さて，ネオダマの筆頭にあるネットワーク化である．ひところ，パソコン通信やLANが大分喧しかったが，昨今はインターネットブームであるらしく，書店のコンピュータコーナーにはインターネット本が山積みされている．フロッピー付きの実用書あり，パソコン少年（レディー，中年？）向け絵入りのお手軽本あり，分厚いマニュアルあり，たいへんにぎやかであるが，そのような中に本書を位置付けていうとするならば，蘊蓄を傾けた教養書という表現が最も似合うようである．

本書において，一応のテーマは，インターネットに象徴されるいわゆる高度情報化の波が我が国に対してどのような影響を与えるか，そして我々はそうした波に対してどのように対処すべきかと設定され，これに関する一応の回答として，この波は我が国に対して幕末・明治維新，及び太平洋戦争の敗戦・民主化に次ぐ第三の開国といわれるべき強いインパクトを持つこと，それに対して我々は豊かな高度情報化社会を築くために情報開国を断行しなければならないことが用意されている．

しかし本書は，このような論旨に沿って全体が求心的に構成されているというものではなく，インターネットに象徴されるいわゆる高度情報化の波全般に関して，ディジタル技術，人工知能など，それにまつわる驚くべき広範囲の数多い話題が，著者の体験的裏付けを含んで稠密に，あたかも連想記憶のごとく紡ぎ出されているものであるというべきであろう．

したがって，本書は必ずしも明解でも，実用的でもないが，しかし我々もそれらを良しとする俗信をしばし離れて，著者の驚くべき蘊蓄に耳を傾け，情報社会のありようを考えてみるような余裕を持ちたいものである．そして例えば，インターネットによる外国へのアクセスは我が国にそれほど大きなインパクトは持たないであろう（例えば言葉の壁，Le Figaro や Der Spiegel をキオスクに置いたとして，どれほど売れるか）などと，難癖を妄想することも一興ではないかと評者には思われるのである．

注）インターネットとは，コンピュータネットワークのプロトコル（あらかじめ定められた情報交換の手順）の標準のひとつであるIP（インターネットプロトコル）を用いて相互に接続された幾つかのコンピュータネットワークの集合体を指す普通名詞であったが，これらインターネットたちに接続されるコンピュータネットワークが増加し，あるいはそれらのインターネットたちが互いに接続されて，合衆国（世界）内にひとつながりの大きなネットワークが形成された結果，それは The internet とよばれるべきものになった．よく耳にするインターネットという言葉はこの大きなネットワークの全体を指して使われている．

畑　栄一（保健統計人口学部）